

中近世移行期の公家社会と武家権力：身分編成の視点から

井手，麻衣子

<http://hdl.handle.net/2324/1931673>

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（比較社会文化），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏名	井手 麻衣子			
論文名	中近世移行期の公家社会と武家権力の研究 ―身分編成の視点から―			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	中野 等
	副査	九州大学	教授	高野 信治
	副査	九州大学	准教授	伊藤 幸司
	副査	東京大学	准教授	末柄 豊
	副査	東京大学	准教授	松澤 克行

論文審査の結果の要旨

序章では本研究の学術的背景をなす日本中近世移行期における公武関係の研究史を整理し、本研究の課題を公家社会を構成する「堂上」と「地下」との身分編成のあり方と、その具体的究明であるとす。加えて、公家社会内部の身分編成に当時の「武家権力」が如何に関与したのかが重要な論点であるとした。一般に「堂上」とは官位五位以上の昇殿（内裏清涼殿の殿上の間に昇ること）を許された者をいい、これを許されない者を「地下」と称して区別するが、この公家身分内の家格秩序は室町期以降大きく変容することとなる。また、本研究における「武家権力」とは室町将軍および織豊期の統一政権をさす。

かかる問題関心のもと具体的な論証が続く。まず第一章「室町期公家社会における地下の昇殿」では、室町期の具体的事例を複数採り上げて、地下の諸家が昇殿を果たしていく状況を具に追う。しかしながら、これら地下諸家の昇殿は家格上昇すなわち身分としての「堂上」への昇格ではなく、家格・身分は地下のままであることが明らかにされた。本研究ではこうした事例を「地下の昇殿」と称し、背景には家格上昇を求める地下諸家の競争、対抗意識が存在することを析出し、さらに多くの場合「地下の昇殿」には武家執奏というかたちで室町幕府・将軍の意向が反映していることを明確にした。「地下の昇殿」を果たした地下諸家としては、昇殿を個人的・限定的なものから、継続的な家格としての昇格へつなげていこうとする。一方、従前の公家社会秩序を維持しようとする朝廷は、こうした地下諸家の志向性には抑制的とならざるを得ない。こうした相克によって従前の「堂上」と「地下」との格差は次第に曖昧となって複雑化し、中間的状況をめぐる史料表現にも混乱を生じる。第二章「戦国・織田政権期における堂上と「役」」では、家格上昇を模索する地下諸家の動向を細かに追究した上で中間的状況を史料表現の差異に注目して整理し、さらに論理的な概念化をすすめる上で公家の家格とそれぞれの家に課された役や家業との相関性を分析することの有効性を指摘している。すなわち、第三章「織豊期における公家の身分編成と家業」では、文字通り当該時期の公家身分と家業との関係を論じる。豊臣政権は武家の統制にあたって官位制や氏姓授与を積極的に活用するが、この前提として複雑化していた公家身分内部の家格編成を明確に整理する必要があった。秀吉は明確な政治的意図をもって中間的位置づけにあった地下諸家を堂上家に位置づけ、かれらに知行を給付するにあたって堂上公家としての家業を課することになる。新たに堂上の家格を与えられた公家諸家は家業遂行との相関性のなかで堂上の家格を保証されることとなる。続く第四章「織豊期公家の集団的参礼にみる身分秩序構造」は附録として収録した膨大なデータ「織豊期公家の集団的参礼記事一覧」に拠りつつ、公家衆の集団的参礼について段階的な分析と評価を

おこなった。室町期における「参礼」とは、年中行事や慶事に際して武家・公家・門跡らが室町第に参集して祝賀をおこなう儀礼をいった。参礼をおこなうのは「昵近衆」と呼ばれる室町將軍の側近公家衆であり、こうした將軍と側近公家衆との関係は義昭の時代まで継続する。信長の時代になると昵近衆に限らず公家衆全体が領知保証のため信長に対して大々的な参礼をおこなうことになる。第三章で明らかにしたように豊臣政権は公家社会の家格・身分編成に積極的に関わっており、参礼においても堂上と地下の間に区分を設け、公家社会における新たな家格意識の定着を促したと論じている。

最後の終章においては、本編において明らかにした論点を整理し、豊臣政権期以降における武家官位の員外化の意義などを展望している。本研究は公家社会を構成する堂上と地下との身分編成のあり方に注目し、比較的長い時間的スパンを設定して、公家の身分編成が公武の関わりの中で変容していく過程を具体的に明らかにし、さらには公家の身分編成における家業の規定性を評価すべきとの議論を展開している。広範な史料に拠りつつ論証は極めて実証的に進められており、本研究は今後の前近代日本政治史研究に大きく寄与することが期待される。以上、論文審査の結果として、本研究が博士（比較社会文化）の学位に値すると認める。